

（承前）

パウロは、一 1-17 の導入部において、彼の職務について、また、彼によって宣べ伝えられている福音そのものについて表明する。すでに旧約聖書において宣べ伝えられている福音、それゆえに（一 16）、まずはユダヤ人に関わっている福音、——この福音において核心を成しているのは、ダビデの子孫として生まれ、死者たちの中から復活したところの神の御子イエス・キリスト、である。この方ご自身が、彼パウロを、ご自身の使者として、すべての異邦の民へと派遣し給うたのである。こうして、ローマにいるかつての異邦人たちもまたパウロの委託の領域の中にいる、ということになる。導入部は、《福音において、全世界に対する神的〈裁きの判決〉の告知（Eröffnung）が起こっている》、しかし、《この〈裁きの判決〉を受け入れこれを甘受する信仰にこそ、すべての人間の救いと生もまたあるのだ》、との確認をもって終わる。

一 18-三 20 は、更なる明瞭な繋がりを形成している。すでに旧約聖書が証ししてきたところのことを常に想起しつつ、《福音においては——それゆえイエス・キリストの使信においては——、事実、或る神的〈裁きの判決〉が、しかも、すべての人間に対する或る否定的な〈裁きの判決〉が、すなわち、同じ仕方での異邦人とユダヤ人に対する有罪判決が、表明されている》ということが示される。

しかしながら、この局面は今や、それに続く本書簡の長大な部分たる三 21-八 39 で詳しく述べられるところによれば、われわれが——再び旧約聖書に導かれつつ——次のことに注目するときは一変する。つまり、《まさしくあの神の〈裁きの判決〉は——これによってすべての者は有罪判決を下されているのだが——、それがイエス・キリストにおいて語られているがゆえに、〔すなわち〕それがイエス・キリストの死において遂行されているがゆえに、この方を信じるすべての者に無罪判決を下し、この方を信じるすべての者を正しいとする。かくして、この〈裁きの判決〉の告知（Eröffnung）としての福音は、もしもこれが信仰において聴かれ受け入れられるときには、事実、福音であり、悪しき使信ではなくして、善き使信である。すなわち、神と人間との和解についての使信であり、義における・自由における・霊の支配のもとでの・人間の新しい生、についての使信である》ということに注目するとき。

この福音が真っ先に信仰を見出さなければならなかったはずなのに、今やまさしく何ら信仰を見出さなかったところでは、すなわち、この福音の決定的な証し——まさに旧約聖書——を手にししながら、しかも明らかに今に至るまで聴き取ることのなかったシナゴグのユダヤ人の間では、この福音は何を意味するのだろうか。そのことが、次に、九～一一章において展開される。

そして、そのことに対応するのが、最後に、一二 1-一五 13 で、一連の暗示的な勧めという形式において、《福音が信仰を見出したとき、それゆえ、イエス・キリストの教会キルヒエにおいて——実にローマの教会ゲマインデもまたまさにこの教会キルヒエとして語りかけられるべきなのだが——、福音は実践的には何を意味すべきものなのか》ということに対する指示である。

全体の終結部（一五 14-一六 27）は、先に言及された個人的伝達を、個々の人物への、また個々の人物からの一連の挨拶を記しており、〔その中で〕一六 17-18 は誘惑者に対するあおいささか唐突に現われる警告を、一六 25-27 は福音においてご自身を啓示し給うた神に対する荘厳な頌栄を記している。

以上が、われわれがこの講義においていささか厳密になぞるべき課題を持っているところのロ

一マ書の幾つかの主要な線である。

完全を期するために、なお以下のような注意書きを。

使徒パウロが事実ローマ書の著者である、ということ。それゆえ、われわれは、かの数世紀間、堂々と文学的慣習であったところのかの偽作の一つと関わっているのでは決してない、ということ。こうしたことが本気で疑われたのは十九世紀のごく僅かの研究者らによってにすぎないし、また、直ちに全パウロ書簡を二世紀に属するそのような模作と見なそうとするのではないなら、決して疑われることはありえないのである。しかし、こうしたことが問題になりえないのは、すでに次のような理由による。つまり、そうした後の時代の精神世界は、われわれがそれについて知っているところに従えば、パウロ書簡において——それゆえローマ書においても——明らかとなっているような精神世界とは、周知のように全く別な精神世界だったからである、と。

一五 1 以下の終結部に関して或る疑いが生じるのは、紀元二〇〇年頃には本書簡のラテン語の諸翻訳が、つまり、一四 23 で終わっていて、この終結部を欠いているような諸翻訳が存在していたに違いない、ということが考えられる限りにおいて、である。かの有名な偽教師マルキオンもまた——もっとも彼は新約聖書のテキストを、本書簡のみならず度を越した自由さで扱ったわけだが——、本書簡をこの短縮された形においてしか知らない、と主張した。しかしながら、すぐにも分かるのは、一四章の主題の取り扱いが一五章に直接的に継続している、ということである。そういうわけで、われわれは、ここで確かに生じているところの問いに対しいかなる決定的重要性をも認めることはできないであろう。

他方、一六 25-27 における神への頌栄は本書簡の元来の構成要素には属しておらず、後に付け加えられたものであろう、という仮定には重大な諸根拠が存する。

もう一つの問いは次のようなものである。特にあの、パウロには個人的に周知の間柄であった人々への多くの挨拶を含む本書簡の一六章は、《この章はなるほどパウロから出たものではあるにせよ、しかし元々はエフェソの教会に宛てて書かれた手紙の一部を成していた》と仮定する場合に、よりよく説明がつくのではないのか、と。この仮説に対する賛成・反対の根拠はほぼ釣り合っている。この章もまたローマ書元来の構成要素に属していた、ということは、全くありうることだし、依然としてそうである。もしもわれわれが、この問いに対しても、なるほど聴きはするけれどもしかしこれを未解決のままにしておくならば、そしてまた、われわれが、伝承の圧倒的な声によって事実われわれに提供されてきておりキリスト^{キルヒエ}教会において事実常に読まれてきたところのテキストに固着するならば、われわれは先人たちの良き仲間なのである。